

独鈷山と夫神岳から扇状に開け、田畑が広がる盆地、塩田平。昔々、その塩田平に住む母と娘がいました。娘のおりんは小さい頃から病気の母を支えながら、母の薬代を稼ぐためにかいがいしく働いていました。

「かーやん、薬だよ」

「おりん、いつもすまないねえ」

「かーやん、それはいわない約束だよ」

絵に描いたような孝行ものなのです。また、絵を描くのが得意だったので子どもたちに絵を描いてやるなど子どもにも慕われていて、おりんのことを褒めぬ村人がいないほどでした。おりんの描いた龍の絵は村で雨乞いするときに奉納されたりと、村人からありがたがられていました。しかし、おりんの願いもむなしく、母の病気が悪化して命の灯が消えようとしていました。

「かーやん、死なないで」

「かーやんはもう長くはない……。おりん、これからは自分のために生きなさい。村の人はいい人ばかりだから、何かあったら助けてもらおうんだよ……」

「かーやーん……」

母が病気で亡くなり、一人ぼっちになったおりんは、悲しくて悲しくてしかたありません。これまで母の薬代のためにと懸命に働いていましたが、その気力もなくなってふさぎ込んでいました。それを見ていた村人は心配で心を痛めていました。子どもたちはおりんを元気づけようと自分たちで描いた絵を持ってきて、村人も様子を見に訪れます。その中でも村の若者でおりんの幼なじみの竜太は、足しげくおりんのもとを訪ねていました。元気づけようと思いついていたり、一向に上達しない絵をおりんに習ってみました。一人ぼっちになつたと思っていたおりんですが、村の人たちの温かさに触れて一人ではないと感じられるようになりました。そして、幼い頃からおりんに優しくしてくれる竜太の支えで徐々に笑顔を取り戻していきます。

「ありがとう。竜太は、いつも大変な時に助けてくれるね」

「やっばり、おりんは笑っていたほうがいい」

「もう大丈夫。明日からは村の仕事を手伝えるから」

そう竜太に告げると、おりんは以前のようにかいがいしく働き始めました。

同じ頃、村に「大池」と呼ばれる大きなため池が造られました。しかし、土手から水が漏れて七分目までしか水を溜めることができませぬ。そこで池の改修をするのですが、どうしてもうまくいきませぬ。村人たちは困り果ててしまします。

「大池がおっこわれるのは、どうしたらいいもんか？」

村の男衆が庄屋の家に集まって話し合うもののいい考えは浮かばず、時間だけが過ぎて

いきます。そんな中、庄屋が口を開きます。

「以前、京の方で暴れ川の治水工事が上手くいかずに万策尽きた時、人柱を立てて神に祈ったところ工事は成就したと聞く」

「人柱って、人を生きたまま埋めるあれかい？」

「そうだ」

「人がおっちんでため池を完成させるなんておっかねえ」

「だが、ため池が完成せずに日照りになっちゃったら、満足な米がこさえられずに村人がたくさんおっちんじまう。水を溜めても水漏れしているところがおっこわれたら、田んぼがおっちんで同じことだ」

「でも、人柱を立てたところでため池が無事に完成するとは限んねえだず」

村人たちは悩みます。塩田平は晴れの日が多く天候に恵まれています、その分雨が少なく、稲作において水を貯めるため池が欠かせません。

「三十年前を思い出してみる。日照りが続いて水が足りず、飢えも苦しいが、渴きはもっと苦しい。いま生きているものも、家族を亡くしている。家族が苦しんで餓死、渴死するのはもう二度と見たくねえだず」

「たしかにそうだけんど」

「そんだけじゃねえ。少ない水を巡って村人同士でいがみあう始末だ」

「そんなことがあったから、今は村人で助け合うようになったんだず」

「それは水があるからだ。水がなくなったら同じことだ。それに他にいい案があるんか？」

「ないけども……」

「では、やるしかねえだず」

ほかにいい案も浮かばず、重い空気のまま、泣く泣く人柱を立てることにしました。

そうになると、古来より神様に捧げるのは若い娘と相場が決まっています。十歳から十五歳の娘が候補となるのですが、自分の娘を進んで人柱に差し出すものなどいるはずありませんし、娘を人柱に出せともいえません。結局はくじ引きで決めることになりました。

村のためにと、人柱の話を言い出しましたが、庄屋にもおけいという十三歳になる娘がいるのでした。

「なんとか、うちのおけいを外すことはできないものか」

身勝手ではありませんが親心が働きます。そして、その親心で庄屋は良からぬたくらみを思いつきます。くじ引きには木箱と木札を使って、赤い丸が書かれた木札を引いた娘が人柱に立つのです。そこで庄屋は木箱に細工をすることにしました。

「明日は一番に引きなさい」

庄屋はおけいに、それだけを告げておきます。おけいは訳のわからないまま黙ってうなずきました。

翌日、村人全員が集められ、庄屋は大池を完成させるために若い娘を人柱に立てることになったことを伝えます。その対象となる娘は四人いて、その中には十五歳のおりんやおけいもいます。そして、人柱に立つ一人をくじ引きで選ぶことも告げられました。

あまりのことに泣き出すもの、青ざめるものさまざまですが、くじ引きが行われることには変わりません。庄屋が進み出て木箱を置き、何も書かれていない木札三枚、赤い丸が書かれた木札一枚を見せて木箱に入れます。

「※おいだれ、赤い丸が書かれた木札を引いたものが人柱に立つでいいな。では、誰が一番に引くか？」（※信州の方言で「お前たち」のこと）

庄屋はおけいに目配せして、くじを引くことを促します。しかし、おけいは怖さのあまり、泣くばかりで進み出ることができません。そこをまだ幼くて人柱がなんなのかわかっていない十歳の娘が進み出て、木箱に手をさっと入れます。木箱から抜いたその手には何も書かれていない木札がありました。

「続いてくじを引くのは誰か？」

庄屋はまたしてもおけいに目配せして、くじを引くことを促します。しかし、今度は勝気な娘が顔面蒼白になりながらも気丈に進み出ます。ゆっくりと手を木箱に入れて、抜いた手にはまたしても何も書いてない木札がありました。

「続いて……、おけい、引きなさい」

残り二人になったところで庄屋は、おけいに引くことを迫ります。それでもおけいは、怖がり前に進めません。

「私が引きます」

おりんが前に出ようとしますが、庄屋は鬼の形相で寄せ付けません。それもそのはず、次に木札を引かないとおけいの人柱に選ばれてしまうのです。

庄屋は木箱の内側に木札がひっかかる細工をして、そこに赤い丸が書かれた木札をひっかけておいたのです。そして、先ほど見せた赤い丸が書かれた木札は、木箱に入るふりをして袖に隠しました。おけいがくじを引いた後に、木箱を激しく動かして赤い丸が書かれた木札を落とす算段だったのです。

おりんに先に引かれると困る庄屋は、木箱をおけいの前までそっと持っていきます。それでも怖がつてくじが引けません。おけいを動揺させまいと、昨夜にくじのことを伝えなかったことを激しく後悔しますが、今度は優しいまなざしで引くことを促します。そして、やつと恐る恐る木札を引いたおけいの手には、何も書かれていない木札があります。庄屋は乱暴にガタンと木箱を置くと、おけいを抱きしめます。

これで人柱に立つのは、おりんということになります。呆然と佇むおりんを見ていられなかったのか、竜太がいいいます。

「なんかの手違いで全部が白札かもしれん。そうしたらやり直しだ。引いてみろ」

おりんがふらふらと木箱に近づき、引いた木札にはやはり赤い丸が書かれています。これでおりが人柱に立つことが完全に決まったのです。

おりんはお世話になった村人たちの役に立ちたい気持ちもあるのですが、さすがに怖さが勝ってしまいます。逃げることも頭をよぎるのですが、そうするとほかの娘が人柱に立たされてしまいます。どうすることもできずに、悲しみと怖さで沈みふさぎこんでおりました。心ばかりのご馳走が用意されるも喉を通るわけもなく、人柱となる翌日をただ待つばかりでした。

くじ引きを見ていた竜太は、胸が張り裂けそうでなんとかおりんを助けられないかと思案に暮れます。ですが、おりんを助けて逃がしたとしても、別の娘が人柱に立たされるだけだと思ふことができせん。

竜太は、子どもの頃におりんと二人で弘法山こうぼうやまにちがい石を採りに行ったことなど、たくさんの思い出がよみがえって助けたい思いが強くなりますが、どうにもこうにも考えがまとまりません。足の向くまま歩いてみると、夕日に照らし出される生島足島神社に着きました。せめて神頼みだけでもとお参りをすると。

「その人、深刻な顔をしているけど何かあったのかい」

声をかけてくる男がいました。竜太は、神主が持つ大幣おおぬさよりかなり大きく変わった形の大幣を持った派手な青年を不審に思いましたが、自分一人で抱えきれないこと、生島足島神社の生島大神と足島大神の二神が繋いでくれた縁と信じていきさつを話すことにしました。

「なるほど、それならば一ついい案があるけどどうだろう？」

碧と名乗る青年の案を聞いていくと、みるみると竜太の顔が明るくなっていきます。話を聞き終わるか終わらないかの刹那、竜太はおりんの家へ走り出しました。

息を切らしておりんの家に向けこんだ竜太は、「おりん！ 今すぐ村を出ろ！ 逃げてできるだけ遠くへ！」とおりんの目をしっかりと見つめて諭しました。

「でも、私が逃げても別の誰かが人柱に立たされます。それならば身寄りのいない私が人柱になったほうが……」

おりんはそう言いながらも、悲しいこと怖いことには変わりありませんから、涙がこぼれてしまいます。

「それは大丈夫。妙案があるんだ」

竜太が碧から授かった妙案を説明していると村人たちが入ってきます。庄屋にいわれ、おりんが逃げ出さないように家から少し離れたところで見張っていたのです。

「話はきかせてもらったぞ」

全ては村人たちに知られてしまいました。

人柱を立てる前の日。夜が更けた頃、庄屋の家にバタバタと村人たちがやってきます。

「おりんが人柱になるのを悲しんで、その前に自分で命を絶ちました」

「どうのことだ？」

「着物に石を詰めて、舌を食い切って大池に身を投げただ」

それを聞いた庄屋は村人たちと大池に駆け付けますが、松明の明かりに水面の一部が血で赤く染まっているのが浮かび上がっているだけでした。

「おりんを見張っていたのにどうしてだ？」

「すまねえ、おりんが一人になりてえというから、最後だからと思って……。そしたら、わからねえように家を抜け出したようだ」

そのほかにも村人たちから、「ため池の方に走っていくおりんを見たで」「池の近くにおりんの筆が落ちていただ」などの証言が集まります。それは全ておりんが舌を食い切って身投げしたことを裏付けるものでしたが、遺体を探しても夜ということもあって見つかりませんでした。

夜が明けて、人柱の儀式の日を迎えます。ですが、人柱になるはずのおりんはいません。かといって犠牲を増やすのはばかられます。おりんの身投げをもって人柱は立ったとして、改修を再開して完成を目指すことになりました。竜太を中心に村人たちは、これまで以上に精を出します。

庄屋はおりんを丁重に供養するとともに、この悲しいできごとを忘れぬように大池を「舌喰池」と名づけることにしました。

村人が池の改修に励んでいたのと同じ頃、北国街道を江戸に向かう一人の娘の姿がありました。旅姿のおりんです。

竜太が碧から授かった案とは、おりんが舌を食い切って大池に身を投げて死んだこととして逃がすというものでした。あの夜、その案は村人たちに発覚したこととん挫したかに思われました。

「おりん、竜太、そういうことなら、おらたちにも手伝わしてくれ」

おりんを助けたいという思いは村人みんなが同じだったのです。

「舌を食い切るなら、鶏の血を用意しよう」

「着物に石を詰めたことにすれば、遺体が見つからなくてもおかしくねえ」

「そうと決まれば、おりんは早く村を出た方がええ」

人柱を立てる話し合いとは打って変わって村人たちは活発です。

慌ただしく旅支度を整えたおりんは、村のはずれの上田城下へと続く道で村人がかき集

めたお金を渡されます。

「母子二人、村のみなさんには大変お世話になって、恩返しもできないままなのに命まで助けていただいて……」

涙ながらにお礼を伝えます。

「あとはおらたちに任せておけばいいから。今夜は上田城下で夜を明かして、朝早くに出て少しでも遠くに行くんだぞ」

「おりんは死んだことになるから、帰ってきちゃんねぞ」

村人たちに見送られ、今生の別れだと思いと涙がさらに溢れます。

「おりん、これを持っていけ」

竜太は、子どもの頃に二人で採りに行ったちがい石を差し出します。

「二人で採りに行ったちがい石だ」

ちがい石は、「誓い石」とも呼ばれていて、弘法大師が「大切に保持すれば災厄から免れさせる」ことを誓ったという伝説を秘める石でもあります。するとおりんは懐からちがい石を取り出します。

「二人で採りに行ったちがい石、私も大切に持っているよ」

「じゃあ、交換しよう」

二人はちがい石を交換しました。それでも名残惜しさが募るばかり。

「二人どものんびりしている時間はねえぞ」

夜が更けるまでにしなくてはいけないことがたくさんあるのです。おりんは何度も振り返って頭を下げるのですが、その姿は徐々に小さくなっていきます。

「竜太、本当はおりんと一緒に行きたいだろうけど我慢だぞ。お前までいなくなったら、おかしいことになっちゃう」

「わかっている。おらはおりんが生きていてくれればそれでいい」

「こっからが容易じゃねえぞ。おりんをおっちゃんだことにして、ため池を完成させないといけないんだからな」

こうして竜太が碧から授かった案は、庄屋を除く村人みんなの協力のもとで実行されたのでした。

村人たちは人柱が立っていないのを知った上で、二度と人柱のような話が出ないように懸命に働きました。子どもたちも秘密を守っています。その結果、舌喰池と名づけられたため池はとても丈夫にできあがりしました

のちに江戸に出て絵師になったおりんと、村を代表して農学を学ぶために江戸に出た竜太が劇的な再会を果たすのですが、それはまた別のお話です。